

		B.C.9,000		B.C.3,000		B.C.1,000		A.D.300		A.D.800		
		B.C.13,000		B.C.5,000		B.C.2,000		B.C.300		A.D.600		
日本	旧石器時代	縄文時代						弥生時代	古墳時代	飛鳥時代	平安時代	鎌倉時代
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期					
北海道	旧石器時代	縄文時代						続縄文文化	オホーツク文化	トドナイ文化	アイヌ文化圏	
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期					

史跡入江・

沿岸地域の暮らしを示す2つの貝塚

史跡入江・高砂貝塚は、入江貝塚と高砂貝塚のそれぞれ二つの地点からなり、小河川に挟まれた噴火湾を望む標高10~20mの台地上に所在しています。遺跡に立つと、東に有珠山、南に噴火湾の対岸に遠く駒ヶ岳を眺めることができます。これらの山はその後の噴火によって形が変わっていますが、縄文時代以来の風景を今に伝えています。

両貝塚は、昭和25（1950）年に伊達高等学校郷土研究部によって最初の発掘調査が行われて以降、札幌医科大学や虻田町教育委員会（現洞爺湖町）によって十数回にわたって調査が実施され、当時の生業や暮らしを知る重要な遺跡として、昭和63（1988）年5月13日に入江貝塚が国の史跡に指定されました。その後、平成14（2002）年3月19日に高砂貝塚が追加指定となり、「入江・高砂貝塚」となりました。

入江貝塚

入江貝塚はこれまでの調査で、縄文時代前期の終わりごろから後期の初めにかけてつくられた厚さ3mにも及ぶ貝塚や^{たてあな}竪穴建物跡、墓などが見つかっています。貝塚からは縄文人が食料としてとったアサリやホタテなどの貝類をはじめ、カレイやマグロ、ニシンなどの魚類、エゾシカやイルカなどの哺乳類の骨などが見つかっています。



こうした獲物を獲得するための道具として、特に、魚類や海獣類をとるためにシカの角などでつくられた釣り針や^{もりがしら}銚頭などが豊富に見つかっていることから、入江貝塚周辺で漁労活動が盛んに行われていた様子をうかがい知ることができます。

その他、貝や動物の牙でつくられた装飾品も見つかっています。これらの中には、遺跡周辺では手に入れることができないイノシシの牙製品やオオツタノハガイ製の貝輪などが見られることから、本州との交流も活発に行われていたことがわかります。

さらに、貝塚には縄文人の墓もつくられています。入江貝塚ではこれまでに15基の墓が発見されています。これは、縄文人が貝塚を埋葬用の特別な場所として考えていたからではないでしょうか。彼らにとって、貝塚は単なる「ゴミ捨て場」なのではなく、アイヌ文



入江貝塚



入江貝塚から出土した骨角器

高砂貝塚

角田 隆志 (つのだ たかし)

洞爺湖町教育委員会社会教育課課長

1969年神奈川県生まれ。94年富山大学人文学部(考古学)卒業。95年虻田町教育委員会(現洞爺湖町)奉職。95年入江貝塚整備事業、2015年高砂貝塚保存整備事業。現在、地域への普及活動や史跡入江・高砂貝塚を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録に向けての活動に取り組んでいる。

化に見られる神聖な「物送り場」の意味を持つものだったのかもしれませんが。

見つかった人骨を調べると、いろいろなことがわかります。中には、頭骨や体幹の骨は20歳くらいの大きさにも関わらず、手足の骨が極端に細く、生前は手足を動かすことができなかつたと考えられる縄文人が見つかっています。この縄文人は、幼いころに「ポリオ(小児マヒ)」という病気にかかり、手足が不自由なまま周囲の手厚い介護を受けながら十数年を過ごしていたと考えられています。

このように自分の力で生活を支えることができないヒトが、十数年間生きながらえることができたということ、命を全うして貝塚へと埋葬されたということは、当時の生活文化を考える上でとても重要です。



病気に侵された縄文人の墓(入江貝塚)

高砂貝塚

高砂貝塚は、台地上につくられた縄文時代後期の初めと晩期の中ごろの3カ所の貝塚と、その中に形成された墓、配石遺構が見つかっています。

噴火湾沿岸は、縄文時代を通じて数多くの貝塚が形成されましたが、その中でも縄文時代晩期につくられた貝塚は、発見例が少ないことから、当時の暮らしを知る上でとても貴重です。

貝塚からはタマキビ・ホタテ・アサリなどの貝類、ニシン・カレイ・マグロなどの魚類、エゾシカ・イルカなどの哺乳類が出土しており、特にアサリやカレイが多く見られることから、貝塚周辺には砂浜が広がる環境だったことがわかります。

高砂貝塚で特徴的なのは、縄文後期のはじめころにつくられた貝塚と縄文晩期の墓域とが、ほぼ同じ位置で見つかっていることです。高砂貝塚では、貝塚に墓をつくるということが、伝統的に引き継がれていたことを示しています。

墓は、土器や石器、石製品などの副葬品を伴い、ベンガラ(赤色顔料)が散布されていました。出土した人骨を調べると、「抜歯」の痕跡が認められる例や胎児骨を伴う妊産婦の墓も見つかっています。

妊産婦の墓は頭位を南方向に向け、ベンガラを多量に散布するという点が他の墓とは異なっていました。縄文期の妊産婦の埋葬例は全国的にも発見例が少なく、高砂貝塚の例はとても貴重です。縄文人にとって妊産婦は、新しい生命を生み出す存在として考えられていたのかもしれませんが。それだけに妊産婦の死は、



高砂貝塚

異常の死であり、通常の埋葬とは異なった扱いをとったと考えられます。

また、墓のすぐ北側には配石遺構が見つっています。中には、土偶やベンガラを満たした土器などが見られ、この地域における埋葬方法や縄文人の高い精神性を知ることができます。

入江・高砂貝塚の保存整備

入江貝塚は、国史跡指定を経て、平成7(1995)年度から9(1997)年度まで、史跡整備を行いました。このとき、入江貝塚の特徴である貝塚の断面剥ぎ取り展示や竪穴住居の復元などを行いました。

高砂貝塚では史跡整備事業を平成27(2015)年度から行っています。整備の主な内容は、縄文時代の貝塚とお墓、近世アイヌ文化期に作られた貝塚と畑跡、さらに小川を整備することです。

整備に際しては、高砂貝塚の価値を保存することはもちろんですが、縄文から現代まで連綿と人の生活が営まれ続けてきたこと、そして、人と自然との共生の場として、縄文のたたずまいを表現することにより、高砂貝塚の特徴を最大限に生かすことができ、同時にすでに整備された入江貝塚、ガイダンス施設とあわせて遺跡の理解を深めていければと考えています。整備はガイダンス施設の増改築とあわせて令和2年度に完成する予定です。



妊産婦の墓（高砂貝塚）

以上は主にハード面の整備となりますが、ソフト面においては、体験学習などの「文化的要素」、野草や水生生物の観察会などの「自然的要素」、縄文まつりなどの「まちづくり的な要素」など、現在行っているものもあわせて整備後も継続して実施したいと考えています。さらに、私たちは、学校と連携して遺跡についての出前授業を行っています。こうした取り組みは将来を担う世代に遺跡の価値を伝えていく上でとても重要だと考えています。

以上のように、史跡整備が行われることによって地域にとって様々な可能性が広がっていきます。整備された史跡を地域のために、どのように役立てていくのかを専門家や地域の方たちと共に考えて実践していきたいと考えています。



高砂貝塚から出土した土偶